

函館のNPOに助成金

光と愛の事業団 直売所運営に活用

障害者が働く福祉作業所を応援する読売光と愛の事業団の今年度の「生き生きチャレンジ」助成事業に、道内からは函館市桔梗町のNPO法人「おはよう共同作業所」(野沢朝子理事長)が選ばれた。助成金50万円が冷凍と冷蔵のショーケースを購入。直売所での果物などの販売に活用する。

今年度はコロナ禍で売り上げが減り、経営に苦しむ作業所を対象に募集。全国63の作業所から応募があり、うち18作業所に総額1000万円の助成が決まった。

おはよう共同作業所は1993年10月に設立。障害

のある20〜80歳代の利用者18人が通所で働き、着物を再利用した布ぞうりを手作りして販売したり、指導員とともに宅配便の配達などの作業を行ったりしている。

運営費の足しにしようとして、年4回のバザーで農家から格安で分けてもらった規格外の野菜などを販売していたが、コロナ禍などで開催できなくなった。昨年10月頃からは、1坪ほど離れたプレハブの直売所での無人販売に切り替えたが、布ぞうりの販売も含めて売り上げは減ったという。

おはよう共同作業所は1993年10月に設立。障害

国道5号沿いにあるプレハブの直売所には、今回購入した冷蔵と冷凍のショーケースのほか、米などの自動販売機が置かれている。商品はリンゴやカボチャ、冷凍の魚介類など様々。営業は午前9時〜午後6時。おはよう共同作業所の野沢明美さん(55)は「助成は大変ありがたい。『コロナ後』には、作業所のスタッフによる販売会なども開催できればうれしい」と話している。



助成金で購入した冷凍と冷蔵のショーケース(函館市内で)

十和田の就労施設に助成

読売光と愛

読売光と愛の事業団が展開する「生き生きチャレンジ助成事業」の今年度の助成対象が決まり、県内では農業を通じて障害者の自立を支援する就労継続支援施設「わ」(十和田市)に70万円の助成金が贈られた。自ら栽培したニンニクを加工販売するための真空包装機、フードプロセッサの購入費に充てられる。

農業で障害者の自立促す



ニンニク加工製品の自動販売機を紹介する日野口さん(8日、十和田市で)

同施設を運営する十和田市のNPO法人「農楽郷(この・カラダ)」代表の日野口敏章さん(71)は、障害者が収入を得られる道を作ろうと、企業の下請けの内職など様々な職種を10年以上も試し、農業生産物とその加工販売にたどり着いた。主力商品は、長期保存が可能で廃棄が少ないニンニク。20代から70代までの施

設利用者22人が、約2・8畝の農場での作付けと収穫、乾燥用ハウス4棟や作業所での加工などに従事している。

熟成させた黒ニンニクを顆粒状にして食べやすくした新製品「いぐなる」(青森弁で「よくなる」の意味)といった製品開発や、自動販売機を使った販路開拓などにも積極的に取り組んできた。その効果もあって、月額平均賃金は、県内の同種施設の平均約1万3000円(2017年度)に対し、昨年度は3万3000円と高い収入を達成した。日野口さんは、「より収益性の高い仕事を作るため、必死で取り組んできた。今回の助成で導入される機械を活用し、障害者が生き生きと働ける居場所作りに取り組みたい」と話している。

障害児働き場に助成

光と愛の事業団 いわきの団体ミシン購入

読売光と愛の事業団が展開する「生き生きチャレンジ助成事業」で、重度の知的障害のある子どもにも働き場を提供する地域活動支援センター「いぶき」（いわき市泉町）に44万円の助成金が贈られた。老朽化した工業用ミシン1台を処分し、扱いやすい家庭用ミシン2台の購入資金に充てられた。



助成金で購入したミシンを前に「製品を一から作り利用者の自信に」と語る鈴木さん（左）と奥村代表（いわき市で）

奥村牧子代表（73）によると、運営母体の社会福祉法人「エル・ファロ」は2001年に発足。重度の知的障害のある子が毎日通える働き場として、いぶきでは現在、利用者が自主製品としてエコバッグ、ポーチなどを製作している。出来上がった製品は地域のバザーやイベント会場で販売される。

指導員の鈴木理絵さん（41）は「最終的には利用者

の自立が目標で、自分自身の力で一から製品を作れたらいい。自分で作った製品を買っていただくことが自信につながる」と語る。しかし、最近はコロナ禍でバザーやイベントの開催機会が減り、売り上げは落ち込んでしまっているという。

同施設では、03年に工業用ミシンを整備したが、老朽化で不具合が生じることが多くなっており、利用者の作業意欲の低下を招いていた。今回の助成を受け、操作しやすい家庭用ミシン2台を購入した。

奥村代表は「これで作業の効率化を図り、利用者に製品を仕上げる楽しさと安全な作業環境を提供することができ。モノを作る喜びとそれを直接届ける幸せを感じてほしい」と話している。

13版 千葉2

地域

32

自立支援へカフェ開店

我孫子のNPO「光と愛」助成決定

コロナ禍で売り上げが減少する福祉作業所などを支援する「生き生きチャレンジ助成事業」（読売光と愛の事業団主催）の助成先に、精神障害者をサポートするNPO法人「自立支援ネット我孫子」（我孫子市湖北台）が選ばれた。助成金80万円でコーヒード豆の焙煎機やミキサーを購入し、14日にJR湖北駅南口にカフェを開店した。

NPOは、うつ病や統合失調症などの精神疾患があ

る人の就労支援活動を行っている。現在の利用者は20～60歳の男女約20人で、宅配弁当の製造や配送を行

ってきた。拠点施設の老朽化に伴い、NPOは市の助成を受けて土地を購入し、木造2階建ての事務所を新築。地域住民との交流拠点にと、1階で「オリーブcafe」をオープンした。カフェでは、厨房で製造した弁当

も販売する。

接客を担当する女性利用者らは、開業前に研修を受けて準備をしてきた。20歳の女性は「気軽に立ち寄れる場所になりたい」と意気込みを語る。

NPOの影山真理子代表（50）は「カフェの仕事を通じて、将来的な就労の幅が広がる。地元の方々には、障害への理解を深めてもらうきっかけになれば。駅周辺の商店会イベントなどにも積極的に参加したい」と話している。

営業は平日午前11時～午後4時。問い合わせは同店（04・7187・6183）。



購入した焙煎機（右手前）やミキサーが並ぶカウンターで開店準備をする影山代表

可成り国へ国分平手茶を輸入し、焙煎機

「匠」のミキサー、ミキサー

し 切

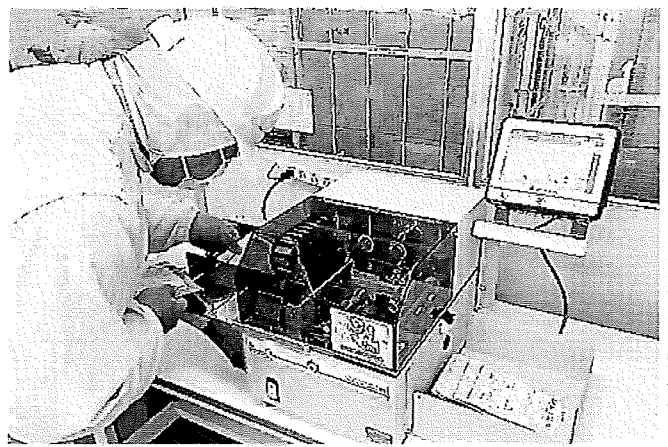
製 作

サ、上、三

昭島の事業所に助成

読売光と愛 プリンター購入

助成金で購入した「サーマルプリンター」で賞味期限の印字作業を行う通所者（昭島市で）



障害者が働く福祉作業所を応援する読売光と愛の事業団の「生き生きチャレンジ」助成事業に、昭島市の社会福祉法人が運営する「リサイクル洗びんセンター」が選ばれた。贈られた65万円の助成金は、商品パッケージに賞味期限を印字する機械の購入費に充てられ、作業の効率化に寄与している。

1994年に開所された同センターは、瓶のリサイクル業務に加え、マンゴー、パイナップルといったドライフルーツや紅茶の葉の袋詰め、パッケージのラベル

貼りなどの業務を企業から請け負う。多い時期は1か月で約1万パック分の作業をこなす。

賞味期限を示す年月日の印字作業が特に大変で、これまででは数字を組み合わせたハンコのような機器で一枚一枚手作業で行っていた。数字が不鮮明にならないよう、袋を置く場所の微調整などが求められ、食品部門を担当する通所者17人の中でも、この作業ができる人は限られていたという。

3月末に新たに導入した「サーマルプリンター」は、

機械のディスプレイで年月日を指定して袋をセットすると、わずか数秒で印字されて出てくる。字の大きさや太さも簡単に変更可能だ。通所者の多くが作業に携わることができるようになり、効率化が実現できて

いるという。同センターの小西百合子・第2事業部長は「作業量の増加は、売り上げアップにもつながる。今後通所者のやりがいあふれる職場にしていきたい」と話した。

外環道トンネル工事停止

大泉JCT付近 マシン損傷で

東日本高速道路などは12日、東京外郭環状道路のトンネル工事で、練馬区大泉町の大泉ジャンクション（JCT）付近のシールド

マシンが損傷し、掘進を停止したと発表した。発表によると、7日にシールドマシンで地中壁を削り取る作業をしていたところ

で、シールドマシンが地中壁に突進し、損傷したと発表された。

掘進を停止したと発表された。発表によると、7日にシールドマシンで地中壁を削り取る作業をしていたところ

永久歯の前歯が生えたレイレイ（東京動物園協会提供）



小田原の社福法人助成

光と愛の事業団 電子秤購入費に

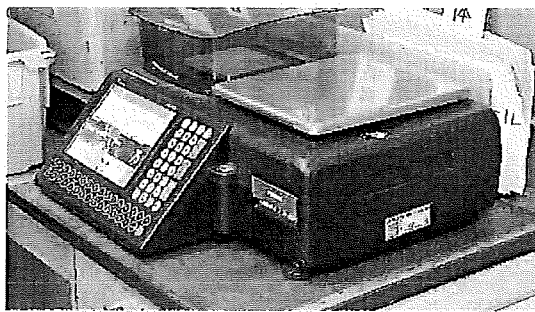
障害者らの自立を支援する「生き生きチャレンジ助成事業」（読売光と愛の事業団主催）に、小田原市の



鋳物製品（手前）の仕分け作業を行う利用者（小田原市で）

物製品の仕分けに使う電子秤の購入に充てられる。

第一しおんは1988年設立。現在は県西部の10、60歳の障害者約70人が、1日約2万個の鋳物製品をリサイクルするために仕分けしている。ただ、コロナ禍で仕事が減少。2020年度の売り上げは580万円と、前年度から80万円も減少したという。



購入予定の電子秤

作業では、正確な個数を納品書に記載するために電子秤を使用していたが、20

年以上使ってきたものが昨年故障。支援課長の池田敦さん（42）は「仕分けは1個あたりの単価が約30銭だが、利用者の多くがやりがいを持って働いている。収入は低くてもやめることは

できない」と頭を抱えたという。

新しい秤を買う予算はなく、レンタルで対応してきしたが、助成事業の存在を知って応募したところ選ばれた。池田さんは「新しい秤で作業が続けられることになり、利用者も喜んで」と話していた。

マリントワー再開業は夏頃

コロナで計画見直し

横浜市は15日、修繕工事中の横浜マリントワー（中区、高さ106メートル）の再開業が夏頃になるとの見通しを明らかにした。当初は今春の予定だったが、コロナ下で運営事業者側が事業計画などを一部見直したことが理由という。

市が市議会に再開業時期や改修後の事業概要などを

報告した。マリントワーの低層階（1〜4階）のうち、1、4階は地元食材を楽しむレストランやバー、2階は観光情報の発信や市民交流の場、3階は会議や宴会などを開催できるホールにする予定。展望フロアはプロジェクションマッピングなどの映像演出も実施する計画という。外観は敷地や低層階の緑化を進め、山下公園などとの調和を図る。

マリントワーは1961年に開業。経営不振により一時閉鎖したが、昨

中部連合読売会

【広告申し込み】
読売エージェンシー東海 052-204-1361
【折り込み申し込み】
読売 I S 052-461-1251

4月21日(木曜日)
旧 3月21日<大安>

月齢19.9
(正午)



あすの暦

岐阜	名古屋	日出	入出	満潮	干潮
5.14	5.13	5.13	18.30	23.49	8.02
18.30	18.30	23.49	8.02	21.56	2.28
23.51	23.49	8.02	21.56	2.28	14.56
8.20	8.02	21.56	2.28	14.56	(中潮)

岐南「もみじの舞」に助成

読売光と愛 パンこね機など購入



パンを作る就労継続支援の利用者ら(19日)

読売光と愛の事業団が、障害者の働く福祉作業所を支援する「生き生きチャレンジ助成事業」の対象施設に、岐南町の障害者多機能型事業所「もみじの舞」が選ばれた。贈られた助成金40万円は、パン製造に使う

オーブンなどの購入に充てられた。社会福祉法人「さくらゆき」が2019年3月に開設し、障害者の生活介護と就労継続支援を行っている。就労継続支援の利用者は19〜65歳の9人で、パン

や生麺の製造、軽作業などに取り組んでいる。

最初は、生麺の製造を行っていたが、新型コロナウイルスの影響で売り上げが落ち込んだ。そのため、利用者が作業に参加しやすく、販売需要が見込めるパンの製造も21年8月に始めたという。

今回の助成金でオーブン、発酵器、パンこね機を1台ずつ購入。以前は予約の受け付けのみで、販売を断る日もあったが、設備が充実したことで、5月17日に念願の直売所をオープンすることになった。

同事業所の稲田永理さん(36)は「助成を受けたことで、(カフェのような)お店を持つという私たちの夢に一步近づけることができた」と喜んでいる。

同事業は、コロナ禍で経営に苦しむ作業所を対象に公募。助成金の財源には、全国コロナ医療福祉支援基金への寄付金を充てた。

全国の地域ニュースは読売新聞オンラインで
https://www.yomiuri.co.jp/local/



三島の「けるん」に助成

福祉作業所で働く障害者の自立を支援する、読売光と愛の事業団の「生き生きチャレンジ助成事業」に、県内からは三島市川原ヶ谷のNPO法人「けるん」が選ばれた。贈られた助成金50万円は食品乾燥機の購入などに充てられ、乾燥野菜の商品化に取り組んでいる。

けるんが新たに導入した食品乾燥機。乾燥野菜の試作を重ねている（三島市川原ヶ谷で）



読売光と愛 食品乾燥機を導入



「ゆめのこ」ブランドのジャムやお茶

けるんでは、栄養豊富な根菜のヤーコン、サツマイモなどを栽培している。また、「ゆめのこ」というブランドで、伊豆半島の各地で採れる食材を使ったジャム、お茶も製造している。ジャムは、イチゴやダイダイ、サツマイモなど季節の食材を使っている。手作りのヤーコン茶、サツマイモ茶、ピワ茶も人気がある。これらの商品は、土産物店

やイベントが重要な販路だったが、新型コロナウイルスの影響を大きく受けており、売り上げの減少を少しでも補おうと、乾燥野菜に目を付けた。

導入した食品乾燥機でヤーコンを乾燥させてみると、上品な甘みに仕上がった。現在は試作を重ね、味や香りが良くなる最適な温度や乾燥時間を探っている段階だ。乾燥野菜に向けた食材探しも続け、エリンギなどに挑戦している。

食品乾燥機の導入は、ジャムやお茶作りの効率化にもつながる。特に、リピーターが多いヤーコン茶は葉や茎を天日干ししてブレンドし、香りや味を調整している。乾燥機を使うことで、天候に左右されずに生産できるようになりそうだ。ネットショップの開設備も進めている。けるんのサービス管理責任者を務める中元聖史さん(51)は「ジャムとお茶、乾燥野菜を組

み合わせたギフトセットなど商品の幅を広げて、売り上げアップを目指したい」と話している。

◇

2021年度の助成事業は、新型コロナウイルスの影響で売り上げが減り、経営に苦しむ作業所を対象に公募し、全国18か所に総額1000万円を助成した。財源は、全国コロナ医療福祉支援基金に寄せられた募金を充てた。

犯罪被害者支援 温かな絵で啓発

熱海の画家に感謝状

県警は、犯罪被害者支援のシンボルマーク「ギョッとちゃん」をモチーフにしたイラスト作品を描いて提供した熱海市の日本画家坂本武典さん(46)に対し、感謝状を贈呈した。

ギョッとちゃんは優しさと思いやりを象徴するハートを抱いた警察庁のキ